

氏名(本籍) 布施英利 (群馬県)
 学位の種類 学術博士
 学位記番号 博美第11号
 学位授与年月日 平成元年3月25日
 学位論文等題目 人体解剖図譜の研究(視知覚像と視知覚形式)

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	美術学部	教授	中尾喜保
(〃)	〃	〃	〃	小町谷朝生
(〃)	〃	〃	〃	水野敬三郎
(〃)	〃	〃	〃	辻茂
(〃)	東京大学	医学部	〃	養老孟司

(論文の内容の要旨)

本研究は、解剖学の基礎的な問題である「解剖図のありかた」を視知覚像という点から検討した。解剖学はヒトをはじめとする生物の形態を追究する学問であるが、その性質の上で「画像」による表現は避けて通れない問題である。これまでのその解剖図そのものを対象にしてきた研究は全くないというわけではないが、その多くは医学的な「内容」を論じたものが多い。そこで筆者は美術を研究してきた経験を踏まえて、視知覚形式という仮説的視点から解剖図を検討した。

I章では本研究の目的・方法・意義が述べられる。それは、ヒト(=ホモ・サピエンス)の「人体は五万年のあいだ変化していない」という前提をもとに、解剖図をその「ヒトの視知覚の機能」のアウト・プットととらえ、分析・検討していくものである。

II章では筆者が主張する「ヒトの視知覚形式」に関する理論、「一次視覚」「二次視覚」理論が検討される。この理論は、美術解剖学・解剖学・視知覚論および大脳生理学などの知見をもとに、筆者の思考が導いたオリジナルな理論といえる。その内容を示せば以下の通りである。

「一次視覚」	「二次視覚」
1. クローズ・アップ — 空間の断片	再構成された空間
2. 瞬間 — 時間の断片	永遠 — リズムある時間
3. 視覚的效果 — 網膜的な描写	共通感覚的效果
4. 再現在、リアリズム	観念的・抽象的な再構築性

そして写真・映画・彫刻の具体的な視覚像の検討を通

して、この「一次視覚」「二次視覚」理論の内容が述べられる。

III章ではこの「一次視覚」「二次視覚」理論の適用によって、これまでの人体解剖図研究にみられなかった全く新しい観点による解剖図研究がなされた。

解剖図には多くがあるが、論究を集中的に進めるために、西洋解剖図の到達点として『ビドロー解剖図 G. Bidloo, ANATOMIA』(1685)が、また日本の江戸の解剖図の到達点として『解剖存真図』(1819)が、主対象として考察される。

まず西洋の解剖図の変遷が、「全体のイメージ」と「部分の独立」という観点から、初期のものから『ビドロー解剖図』まで述べられる。初期の解剖図は全身骨格という「全体のイメージ」を描いたもののみだったが、レオナルド・ダ・ヴィンチの解剖図に至り初めてその「部分」が描かれるようになる。その「部分の独立」がさらに進み、ヴェサリウス A. Vesalius の『ファブリカ Fabrica』において「全身骨格」と「バラバラの骨」の系譜が集大成される。それは解剖図つまり視覚像の問題だけにとどまらず、解剖学用語つまり言語による認識の変化をひき起こす。解剖学用語 skeleton の成立事情を、解剖図との関係から、筆者が最初に明らかにした。

以上の西洋解剖図の系譜を踏まえて、その到達点としての『ビドロー解剖図』が考察される。「全体のイメージ」と「部分の独立」という西洋解剖図の系譜から、この解剖図には「空間の断片(=クローズ・アップ)」を描くことが認められる。またこの解剖図の中の一枚にある「死体に止まっている蠅」が「瞬間」の象徴であり、それが輪郭線のない陰影のみで描写されているという「視覚的效果」が述べられる。さらに正確な形態(=リアリ

ズム)についても述べられた。

以上のことから『ビドロ解剖図』は「一次視覚」的要素を全て満たしている視覚像であることがわかった。つまり『ビドロ解剖図』は「一次視覚」の視覚像であり、さらに言えばその「典型」なのである。

次に日本の江戸の解剖図について述べられる。

まず西洋の解剖図の翻刻である『解体新書・付図』(1774)の考察が行なわれる。この解剖図は、複数の西洋解剖学書を原画として描かれるが、その原画には「一次視覚」の典型であり西洋解剖図の到達点である『ビドロ解剖図』も含まれる。その原画と翻刻を比較検討した結果を纏めれば、「一次視覚」の解剖図を手本に描いたにもかかわらず『解体新書・付図』は「二次視覚」のものであり、つまりここに視知覚形式の変容が認められる。

そして江戸の解剖図を概観した後、最後にその到達点としての『解剖存真図』(1819)の考察が行なわれる。

『解剖存真図』の中の多くの解剖図は実際に腑分けされた死体の観察記録であるが、例外的に数枚は他の解剖図を模写したものが含まれている。その中には、先に論じた『ビドロ解剖図』を翻刻した『解体新書・付図』をさらに模写したものがあつた。これは一種の「リレー画」であるが、その模写の過程に、視知覚形式の変容が観察できる。結論として『解剖存真図』は「一次視覚」の視覚像であるといえる。この解剖図の第一の特徴は正確な色彩にあるが、色彩はまず網膜の錘状体でとらえられ、視神経を通り脳へと伝えられ、それによって情報処理が進む。そして「正確な色彩」とは、その情報処理の初期の段階の知覚に対応すると想像される。それは網膜の機能のアウト・プットと言え、まさに「一次視覚」である。

以上、東西の代表的な解剖図について考察した。その結論として『ビドロ解剖図』と『解剖存真図』が「一次視覚」の典型であることを明らかにした。そしてこの二つはまた人体解剖図の傑作でもある。よって「一次視覚」の解剖図の典型が即ち解剖図の傑作でもある、といえる。

以上の所見をまとめると、解剖図とは「一次視覚」である。いいかえれば「一次視覚」こそ解剖学の第一の基本といえるのである。それは近代の西洋でも、日本の江戸でもそうである。まず「一次視覚」を徹底してみる、そしてその上に立って解剖学は展開するのである。

最後に「IV章、本理論の応用と発展性——今後の課題について」が、美術史学・大脳生理学との関係で論じら

れ、今後の課題を展望する。

要約して言えば、本研究で行なわれたのは、美術と解剖学を一つの共通の土俵の上で論じる、ということである。それらさらに言えば、芸術と科学を「ホモ・サピエンスの脳の機能の発現」ととらえ統一していくことである。